

旧い年が去り、新しい年が始まりました。皆さんは、どのような「お正月」を過ごされたでしょうか？率直に言いまして、わたしの正月は、少々寂しいものでしたね。妻は老父母の待つ実家に帰り、私は老いた母と、二人だけの正月を過ごしました。子供たちも大きくなって、帰ってきませんしね。みんなで集まって、にぎやかに過ごした「お正月」は、過去の世界のものになりました。一体いつからこんな状態になってしまったんですかね。

会社を定年退職してからは、正月になるとゆっくり体を休めるという「独特の解放感」は、当然のことながら、なくなりました。社会的には、核家族化がすすんで、親と子がそれぞれ別の住居をかまえるのがあたりまえ、という社会環境になってしまいましたね。個人的な問題でいえば、私の父が3年前に脳卒中で倒れて、寝たきりの入院状態であることは、私たち家族の大きな心の重荷になっています。いろんな事由があるにせよ、寂しい正月を過ごしている人たちは、この世に大勢いるに違いありません。わたしの置かれている状況は、まだいい方なのでしょう。私にとっての唯一の救いは、上の子が孫を連れて、正月明けの休日に帰省してくれることですかね。

暇に任せて、大晦日から正月にかけて古い映画を大分見ました。西部劇の古い名作を2編ー「荒野の決闘」と「駅馬車」、そして邦画は小津安二郎の2作品ー「秋日和」と「彼岸花」です。こちらは母の好みを考慮して選び、いっしょに楽しみました。

「荒野の決闘」の方は、牛を連れて砂漠を移動していた男が、悪党たちに牛を盗まれ、兄弟を殺される。そこで、自分が保安官(ワイアット・アープ)になって、仇討をする、という話。ワイアット・アープが、ご婦人とごごちなくダンスをするシーンでは、ヘンリーフォンダがユーモラスでいい感じを出していました。重い肺炎(?)を患っているガンマン、ドク・ホリディとの緊迫した友情関係もいいですね。ヴィクター・マチュア演ずる、この男は名うてのガンマンでありながら医者であり、いつも自分の死と向き合っているような、暗い表情をしたインテリなんですね。彼が、シェイクスピアの中の名セリフをそらんじてみせる場面なんか、気障っぽくてかっこいいですよ。



「駅馬車」の方は、西部開拓時代に、危険なインディアン居住区を通る駅馬車に乗り合わせた、様々な男と女たちの人間模様を描いた映画です。若き日のジョン・ウェインの、はつらつとした動きも魅力的ですが、アル中の医者に扮したトーマス・ミッチェルという俳優さんももい味を出していましたね。どちらも何度も見た作品で、ストーリーはわかっているし結末も知っているのに、やはりおもしろいし、見るたびに新しい発見があるんですね。



二つの作品はともにジョン・フォードの初期の名作で、今から60年位前の映画ですね。そして両方とも「モニュメントバレー」という砂漠で撮影されているんですね。、実は10年前に、これらの西部劇によく出てくる「憧れの撮影現場」に行ったことがあるんです。どこまでも果てしなく続く、赤い色のサラサラの砂の砂漠と、切り立った大きな岩山があるだけの場所で、実に雄大な風景でしたが、とても人間が住める場所ではない、と感じましたよ。

昼夜の温度差も大きく、冬になると雪に埋まるような環境ですから、現在では、観光と牧畜を営む、原住民のナバホ族が少数ながら住んでいるだけですが、今から100年以上前には、牛を追ってカウボーイたちが馬で走り、多くのインディアンたちが、ここで生活を営んでいたのでしょう。このような厳しい自然環境の中でも、人間の生活が営々として引き継がれていた、ということに驚かされました。

新年の挨拶のつもりが、長々と「映画解説」をやってしまいました。小津作品の方は、また機会をあらためてやりたいと思います。今年も引き続いて、くだらない雑文に、お付き合いのほど、よろしくお願いします。

「寂しい時でも、ええ映画を観りや、また元氣もわいてくるいうもんよのう」

( '12・1・5 )